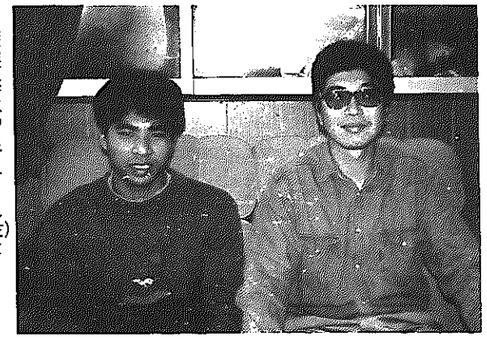
毎日接していると、自然と気持ちが通じていく

●海外農業研修生を受け入れて9年　小嶋洋朗さん（西笠巻新田2）



▶農業研修生のスダナさん（左）と

にっこり笑って写真に収まったお二人。農業研修生としてインドネシアから来たイ・マデ・スダナさんと、受け入れ先の小嶋洋朗さんです。

農業を営む小嶋さんの家に、海外農業研修生がホームステイするようになったのは十年前から。社団法人・県国際農業交流協会の依頼にこたえて始まり、以来、タイ、ナイジェリアなどから毎年一人ほどのペースで研修生が来ています。「マデ男（スダナさんの愛称）君が九人目。四月に来て八カ月たったけど、もう家族みたいなもん」と小嶋さんは話します。

「当初、研修生を受け入れることには、さすがに家族も反対した。でもおれも二十歳のころ、一人でアメリカで農業を学んだ経験がある。言葉がまったく通じない土地で、一年間学ばせてもらった。いろんな人にお世話になった。その恩返しをしたいと言ったら、家族も納得してくれたんだ」。

ホームステイを受け入れながら、小嶋さんが感じたのは文化の違い。「東南アジアの人はお年寄りを大切にする。そういう意識が身に着いているんだろうね。マデ男君もばあちゃんの布団を干してあげたりするから、すっかり気に入られてる」、「そして本当に物を大切にする。日本は浪費文化で『消費は経済だ』なんて言ってるけど、家の中なんてごみの山じゃない。かえっておれたち日本人の方が学ぶべきことが多いよ」と語ります。

市内の青年のイベントなどを通じてスダナさんもたくさんの友達ができました。そんなスダナさんを見ながら小嶋さんは「いろんなところから誘いが掛かるのはうれしいみたいだね。若いやつらと魚釣りに行ったり古町に遊びに行ったりしてる。そうやって言葉も覚えていく」、「でも不思議と家族が一番言葉が通じるんだ。毎日接しているから、何を考えているのか、何をしたいのかが自然と分かる。言葉もインドネシア語と日本語の中間みたいのができてしまっている。もちろん家庭に溶け込んで初めてそうなるんだけど。だからおれは特別扱いはしない。当然しかることもある。そうやって気持ちが通じていくんだ。ホームステイを受け入れながらそれが分かってきた。言葉の壁なんてないってことだね」とも。

海外生活の経験のある小嶋さんは、日本の外交の問題点を強く指摘します。「農業交渉でも何でも、日本は外交で苦戦してるだろ。あれは相手の国に味方がいないからなんだよ。偉い人が向こうに行って偉い人としか話をしない。金ばっかり掛けてさ。本当に大切なのはおれたちのような末端の交流。それが進んでいけば日本も理解されてきて、交渉もスムーズになるはずなんだ」と分析します。

今月中にはインドネシアへ帰ってしまうスダナさん。小嶋さんの気持ちを知ってか知らずか、「日本そして白根は、進んでいるけど町の中にも田んぼがあってとても良い所です。帰ったら覚えた農業技術はもちろん、日本のことをたくさんの人に伝えたいですね」と語ってくれました。

尊重し合う意識を養ってもらいたい

●新潟県国際理解教育研究会副会長

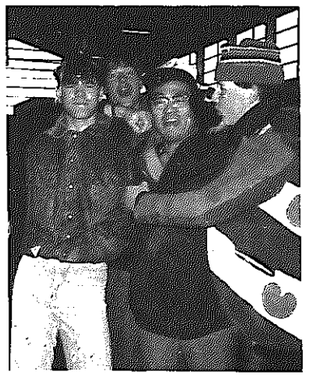
小沢秀雄さん（大鷲小学校校長）

「人間対人間の触れ合いなら、そんなに言葉は要りません。十分意志は通じ合えます」。オランダの日本人学校の教師として、三年間の海外生活を経験したことのある小沢さんは、そう語ります。

若いころから国際感覚を身に着けたいと思っていた小沢さんがオランダへ渡ったのは四十歳のとき。家族六人を連れての渡欧でした。「家内も母も一緒に行ったんですが、一週間で買い物ができるようになりましたね。絵をかいたり物々交換したりと、いろんな手段を取っていたようです」と当時を振り返ります。

「オランダは多民族国家。もちろんオランダ語が話せない人もたくさん暮らしています。言葉や生活習慣、主義主張もいろいろなのに、それをすべて受け入れている。長い歴史がそうさせるんでしょう」、「混とんとしているようでまとまっています。国際理解、国際交流という言葉すらありません」。

三年間の海外生活の経験は小沢さんにとって貴重な財産。「子供たちにも、いろんな国の人と品物や手紙のやりとりをしてもらいたい。同じ地球で生きていくため、お互いが尊重し合う意識を、実体験を通じて養ってほしい」とは教育者としての考え。また「白根にいる外国人が、この地で何かを獲得できるよう手助けしてあげるのが、私たち市民の務めだと思います」とも。県国際理解教育研究会副会長として研究大会を開催したり国際交流の場を設けたりと、意欲いっぱいの小沢さんです。



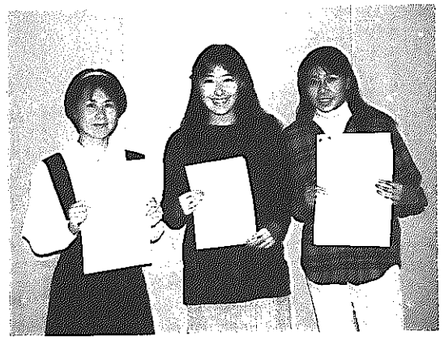
▲オランダで行われたスケート世界選手権の会場で。右から2人目が小沢さん

生活に必要な情報を外国人に提供

●外国語のごみの出し方パンフレットを作った3人組

白根国際交流協会

武石和美さん（文京町）
大矢美由紀さん（高校前通）
関根　愛さん（諏訪木7）



▶左から武石さん、大矢さん、関根さん

地域に住む日本人と外国人との間で最も問題になっているのがごみの出し方。日本語がほとんど理解できないために、ごみステーションに決められた日以外にごみを出したり、分別がきちんとされていなかったりということもかなりあるようです。そこで、この問題に目を着けた白根国際交流協会の三人の女性が、外国人にも分かるごみの日パンフレットを作成。この冬に完成する予定です。パンフレットは、中国語、ポルトガル語、スペイン語、英語の四種類が作られ、台所に張ってもらえるようにとポスター形式で作られています。

パンフレットを作成したのは同協会の大矢美由紀さん、武石和美さん、関根愛さんの三人。昨年の春、外国人が多い高校前通に住む大矢さんが、町内会費を外国人のアパートに集めに行ったときに、日本語が話せるブラジルの人から「白根には看板などでも外国語で書かれているものが少ない」と言われたことがきっかけになりました。最初は「英語だけでも」と思っていましたが、その後台湾で暮らしたことのある武石さんが同協会に入会。今年二月には南米のホンジュラスに留学していた関根さんも入会したことから、四カ国語でパンフレットを作成しようということになりました。中国語は武石さん、英語は大矢さん、スペイン・ポルトガル語は関根さんが担当。パンフレットは、衛生センターのごみのポスターをもとにして、ごみの出し方を翻訳したものです。知り合いの外国人に添削してもらったり、外国の友達に連絡して分からない言葉を教えてもらったりとたくさんの人の協力で出来上がりました。

「人と人との付き合いには、言葉はそれほど重要ではありません。でも情報を伝達する手段としての言葉はとても大切。だから生活に必要な情報を提供するという意味で、このパンフレットを作りました」と三人は作成の意義を話します。翻訳してみての感想は、三人とも「担当してみると、実際に分からないことが多かったです。話すことはできるけど、書くことは難しいですね。辞書で調べた言葉でも、実際に使われている言い回しと違ったりして思ったより大変でした」とのこと。

「言葉が通じない土地で暮らす人のためこれからもいろいろな情報提供のお手伝いをしていきたい」と今後の活動にも意欲的な皆さん。それぞれが思いを込めて作ったパンフレットは、この冬に印刷され、市役所市民生活課の窓口に置かれるほか、必要のあるごみステーションに看板として掲示される予定です。彼女たちの努力は、言葉の違いから生じる摩擦を少しずつ解消していってくれることでしょう。